

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：30102

研究種目：新学術領域研究(研究領域提案型)

研究期間：2009～2013

課題番号：21101005

研究課題名(和文)琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究

研究課題名(英文)The Examination of Environmental and Cultural Changes during the Pre-and Proto-historic times in the Ryukyu archipelagos

研究代表者

高宮 広土(Takamiya, Hiroto)

札幌大学・地域共創学群・教授

研究者番号：40258752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 47,300,000円、(間接経費) 14,190,000円

研究成果の概要(和文)：琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷を実証的に検証するために二本の柱を軸として研究を実施した。まず、糸満市に所在するフェンサ城貝塚の発掘調査である。本遺跡は、貝塚時代後期後半からグスク時代にかけての遺跡であり、両時期における環境と文化の変遷を理解するために、学際的なチームで臨んだ。その結果、両時期に環境と文化が激変していた事を解明した。次に、本研究の目的を達成するために、計9回の研究会を開催した。この研究は若手を中心とし、北は種子島から南は先島諸島までカバーし、学際的および国際的な研究会であった。これらの発表を通して当該地域の考古学が世界的にみて大変重要な地域である事が確認された。

研究成果の概要(英文)：In order to understand environmental and cultural changes during the pre-and proto-historic times in the Ryukyu archipelagos, we conducted two main approaches. One is the excavation of the Fensa Gusuku Shellmidden, which is dated late Shellmidden and Gusuku periods. The excavation team consisted of not only archaeologists but also other scientific areas. The analyses of the interdisciplinary approach have revealed that there was enormous environmental and cultural changes between the two periods.

The another approach was a total of nine study meetings. More than 70 presentations were given. The meeting is characterized by as follows. a) It covered from Tane island to Sakishima islands. b) Most presenters were young ones. c) It covered other islands in the world, such as Oceania, California Channel islands, and Caribbean Islands. d) It consisted of not only archaeologists but also other fields. As a results, extremely unique aspects of cultural and environmental were understood.

研究分野：生物学

科研費の分科・細目：人類学・自然人類学

キーワード：琉球列島先史・原史時代 島の先史学 島嶼適応 狩猟採集 農耕 サンゴ礁資源 貝塚時代 グスク時代

1. 研究開始当初の背景

海外の島の先史学では島の環境は大変デリケートで、特に人間集団が島嶼環境に植民すると大きな環境変化が引き起こされるといわれていた。また、島嶼環境は大陸と比較して食資源を含む資源に乏しい。人間集団が島嶼環境に適応した際、その後人口はキャリーイング・キャパシティーに向かって急増する。人口の急増に加えて、人間集団による森林資源利用や土地利用等もデリケートな島嶼環境に影響を与えた事が知られていた。実際世界の島々では、人間集団が植民すると環境の劣悪化あるいは破壊が起こり、大量の動物の絶滅が起こった。人間集団植民後の環境の劣悪化あるいは破壊と動物の大量絶滅は島の先史学では「常識」あるいは「ルール」と解釈されていた。さらに、世界の島々では劣悪化する環境の中で文化の変遷もおこった。すなわちヒトの集団が彼らを取り巻く環境に影響を与え、その環境が文化の変遷に大きく寄与したのである。

琉球列島(特に南島中部圏<奄美・沖縄諸島>)においては本土復帰以降の開発により日本の他地域と同様に考古学的データの蓄積は膨大なものとなっていた。しかしながら、他地域でみられた「常識的」な文化現象の存在については全く理解されていなかった。琉球列島においては環境と文化に関する視点で先史・原史時代の研究が実施されていなかったからである。つまり、琉球列島の島々を「南島」や「南西諸島」等と表現される事は多々あったが、世界の他の島の先史学とは異なり、本列島の先史・原史時代を島嶼環境という特殊性を考慮した研究は皆無であった。また、本土復帰後の膨大な資料の蓄積にも関わらず、時間の物差しとなる土器編年も不明な点がいくつも存在した。文化の変遷に関しては大まかに旧石器時代 貝塚時代 グスク時代と考えられていたが、これらの時代における環境と文化の変遷に関する理解もほとんどなされていなかった。さらに、琉球列島のような島嶼環境における先史・原史時代を理解するためには、考古学のみならず他の関連分野との情報の共有等も必要不可欠であったが、このような機会も限られていた。また、同様に琉球列島全域の考古学的情報を議論する場もなかった。さらに、琉球列島先史・原史時代をより客観的に理解するためには世界の他地域の情報を得る必要もあるが、このような機会も存在しなかった。つまり、琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する総合的な情報は皆無に近い状況であった。

2. 研究の目的

本研究において主な目的を3つ設定した。まず、琉球列島先史・原史時代において人間集団・文化による環境へのインパクトおよび環境から人間集団・文化への影響の有無を実証的に検証することである。つまり、世界の島々の考古学的データおよび解釈と同様に、

琉球列島においても人間集団の植民後に環境の劣悪化あるいは破壊がおこったのか、あるいは琉球列島の考古学的データは、この世界的な傾向あるいは「定説」を否定するのであるか。

次に、本研究では文化の変遷についても詳細に検証する事も目的とした。先史時代(主に貝塚時代)から原史時代(グスク時代)にかけて、大きな変遷があったといわれているが、その規模はどれほどであったのであろうか。さらに、数千年にもわたる貝塚時代における文化の変遷はどのようなものであったのであろうか。

最後に、第一と第二の目的を総合的に検証し、琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する結論を得る事である。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では2本の方法をコアとした。1本目は、沖縄県糸満市に所在するフェンサ城貝塚の発掘調査である。貝塚時代後半(後2期)からグスク時代にかけて大きな文化の変遷があったといわれているが、後2期とグスク時代の両文化層を包含する遺跡はほとんどなく、その稀な遺跡の一つが本貝塚である。後2期からグスク時代における環境と文化の変遷を検証するために、考古学プロパーのみならず、動物考古学、貝類学、古人骨学、あるいは古代民族植物学等の関連分野の研究者も調査に参加した。いわゆる学際的なアプローチである。

2本目のコアは、琉球列島先史・原史時代をより多角的に理解するために、琉球環境文化史研究会という研究会を開催した。本研究会は以下の点で特徴付けられる。本研究会以前に地理的に北は種子島から南の石垣島までを研究対象とした研究会は存在していなかった。本研究会では、琉球列島北部圏から南部圏までカバーした。同様に、本研究以前は、考古学以外の研究分野と情報を共有するという機会も限られていた。本研究では、サンゴ礁学や堆積学等の関連分野の研究者に参加・発表してもらった。さらに、琉球列島における考古学研究は、他国の島々に関する情報をほとんど有していなかった。それゆえ、本研究では海外の研究者および海外の島嶼環境の環境と文化について研究を行っている研究者に参加・発表をしてもらった。琉球環境文化史研究会は広域性、学際性、および国際性で特徴付けられる。さらに、1本目および2本目のコアにおいて、20代後半から40代前半の若手が中心であった事も本研究の特徴の一つである。

4. 研究成果

a) フェンサ城貝塚発掘調査

平成21年度～平成23年度に3次にわたり発掘調査を実施した。同貝塚は、石灰岩丘陵の突端部に所在し、後2期およびグスク時代の複合遺跡である。発掘調査の主な目的は、

後2期からグスク時代における1)土器やその他の人工遺物の変遷にかんする詳細な検証、2)貝類および脊椎動物利用戦略の検証、3)植物食利用の解明であった。加えて、沖縄(琉球列島)考古学初の試みとなるフェンサ城貝塚人による環境への影響を検証するという本研究の最重要目的もあった。

崖上、崖下、および低地に計10箇所のトレンチを設定した。II層がグスク時代で、III層が後2期であった。崖上は主にグスク時代の遺構や遺物が検出され、崖下からはグスク時代および後2期の包含層が確認された。

詳細な出土遺物の分析から、後2期からグスク時代にかけてフェンサ城貝塚(おそらく奄美大島を含む南島中部圏)において、人工遺物も自然遺物も激変していた事を明示するデータを得た。例えば、土器に関して後2期の土器はその前時代の土器からの流れで理解する事ができるが、グスク時代の土器は後2期の系譜では説明ができないほど変遷していた。また、貝類利用に関しては、後2期には他の貝塚時代の遺跡と同様にマガキガイ等のサンゴ礁域の貝類を採集していたが、グスク時代には貝類をほとんど利用しないという、沖縄考古学において初めてとなる見解を提供する事ができた。さらに、脊椎動物利用に関しては、後2期にはやはり同時期の他遺跡と同様にサンゴ礁域に生息するブダイ等の魚類を利用していた。しかし、グスク時代には魚類が激減する一方で、ウシ等の家畜動物が急増する。1mm程の小型魚骨の分析からは、後2期にはサンゴ礁の魚類を利用していたが、グスク時代になると回遊魚を食していた事も判明した。植物食利用にしても後2期には野生植物を食料として利用していたが、グスク時代になるとイネ等の栽培植物が主な食料となった事も判明した。

さらに、カタツムリの分析を通して、後2期には人による環境への影響はほとんどみられないが、グスク時代になると農耕の開始に伴い、森林伐採があった事を沖縄(琉球列島)考古学において初めて示す事もできた。同一遺跡においてこのような成果が得られた遺跡は未だかつて存在しない。

フェンサ城貝塚における発掘結果により、後2期とグスク時代という約100年から200年という短期間に劇的な文化変遷があった事を明示する事ができた。

b)琉球環境文化史研究会

琉球列島先史・原史時代をより多角的に理解する事を目的として、本研究研究期間に計9回の研究会を開催した。若手を中心に延べ70人以上の研究発表があった。上記したように、この研究会は、広域性、学際性および国際性で特徴付けられる。このような研究会は未だかつて存在せず、計9回の研究発表会を通して、重要な情報を共有し、交換し、議論する機会を持てた。その結果、特筆すべき点がいくつも得られた。

まず、土器編年に関して、主に南島中部圏

に集中して検証した。その結果、以下の点において意義ある成果を得た。新編年呼称：地理的・行政的な理由等で、様々な編年が提唱されていたが、それらの問題点を吟味し、新たな編年案を提唱した。本報告で使用している編年は新編年案に基づいている。編年と同様に、本研究以前においては土器研究者により個別的・地域的に実施されていた分析に関して、彼らが議論できる場を提供し、より最小の単位で分析・検証を行った。その結果、研究期間以前と比較してより緻密な土器編年(案)を確立する事ができた。より緻密な土器編年をもとに、土器を含む人工遺物や住居跡等の遺構に関して、貝塚時代に変化は認められるが、文化の一大画期は貝塚時代とグスク時代にかけてであった事を確認した。

本研究は学際的な研究でもあり、他の分野からも大変意義のある情報が得られた。そのいくつかを紹介すると、まず、サンゴ礁環境形成についてである。当該地域においては、約6500年前にサンゴ礁形成開始期があり、約4000年前に今日みられるサンゴ礁環境が形成した。貝類分析によると、約6500年から小規模なサンゴ礁環境が存在した可能性があるが、サンゴ礁環境の成立期およびその後には人々はこの環境の魚貝類を多用していた。サンゴ礁形成期とサンゴ礁資源利用が合致したのである。また、この地域における農耕の開始に関しては長年の論争があったが、本研究により開始期が9~11世紀であったことも突き止めた。炭素・窒素安定同位体分析によると貝塚時代の人々は海資源を大いに利用したが、グスク時代になると植物食(おそらく栽培植物)がウェイトを占めるようになる。植物利用および動物利用もやはり貝塚時代とグスク時代に一大画期があった事を示した。また、炭素十四年代の精査も実施され、土器編年と理科学的年代の比較検討も行われ、より緻密な編年を確立した。

さらに、この点も琉球列島考古学で初めてのことであるが、海外の島々すなわちカリフォルニアチャネル諸島、カリブ海、ミクロネシア、メラネシアおよびウオーレシアの島々に関する報告もあった。その結果、琉球列島先史・原史時代を客観的に理解することができた。さらに、上記の研究成果と合わせて、世界的にみて琉球列島先史・原史時代の稀少的価値も判明した。具体的に述べると、1)旧石器時代にホモ・サピエンスがいた島、2)狩猟採集民がいた島、3)狩猟採集から農耕への変遷のあった島、4)狩猟採集のバンド社会から王権の成立した島、5)人間集団による環境への影響が最小であった可能性のある島。5)については、農耕の開始したグスク時代において森林伐採等はあったが、その影響も最小限であった。この点については、琉球環境文化史研究会において、最新の堆積学による分析からも支持されている。

以上より導かれる結論は、貝塚時代におい

ては環境と文化が調和して共存し、グスク時代になると農耕の開始による陸域環境における人による影響はあるものの、他の島々にみられた動物の絶滅は皆無であった。さらに、陸域における環境の変遷は、海域まで影響をもたらす事がなかった。フェンサ城貝塚の発掘調査および琉球環境文化史により、本研究の目的は達成できたと考える。さらに本研究を通して若手研究者の育成にも大きく貢献した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計120件内査読有31件)

高宮広土・千田寛之「琉球列島先史・原史時代における植物利用-奄美・沖縄諸島を中心に」『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷 第2集』,127-142,六一書房,2014, 査読無.

新里貴之「沖永良部島鳳雛洞第4洞口遺跡の特質」『Archaeology from the South II』, 289-300, 2014, 査読無

新里貴之・北野堪重郎「奄美諸島・貝塚時代後1期の土器文化」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』,145-156,六一書房,2014, 査読無.

新里貴之他(員数4名,1番目)「琉球先史・原史文化の考古学的画期」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』,305-311,六一書房,2014, 査読無.

Hudson, Mark「先島諸島における先史時代のヒトと生態史-宮古島長墓遺跡を中心に-」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の返還第2集』,181-194,六一書房,2014(査読無)
黒住耐二「貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』,55-70,六一書房,2014, 査読無.

高宮広土「奄美・沖縄諸島へのヒトの移動」『人類の移動誌』,182-197,臨川書店,2013, 査読無.

高宮広土「世界の中の先史琉球文化」『第四紀研究』51(4):239-245,2013, 査読有.

高宮広土・新里貴之「琉球列島貝塚時代における社会組織の変化」『古代文化』64(4)98-110,古代学協会,2013, 査読有.

新里貴之・鼎丈太郎「瀬戸内町安脚場遺跡採集土器(阿波連浦下層式土器)」『奄美考古』7:44-60, 奄美考古学会,2013, 査読無.

Hudson, Mark(編著)『南嶺の長墓遺跡』西九州大学持続的環境文化研究所 2013(査読無)

Hudson, Mark Navigating disciplinary challenges to global sustainability science, *Documenta Praehistorica* 40: 219-226,2013(査読有)

黒住耐二「首里城跡淑順門西区および奉神門埋蔵地区の発掘調査で得られた貝類遺体」『首里城跡-淑順門西地区・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書』68:186-200,2013, 査読無

高宮広土・千田寛之「北谷グスク出土の植物遺体」『南島考古』31:86-94,2012, 査読無.
新里貴之「貝塚時代後期文化と古墳文化」『古墳時代の考古学7:内外の交流と時代の潮流』,146-158,同成社,2012, 査読無.

Hudson, Mark(員数4,1番目)Prospects and challenges for an archaeology of global climate change, *WIREs Climate Change* 3: 313-328, 2012. 査読有.

ハドソン, マーク(員数5名,1番目)「現在の地球気候変動と考古学現的研究-社会生態システムのレジリアンスを高めるための考古学的戦略の構築-」『第四紀研究』51:267-274,2012.(査読有)

Hudson, Mark 'Austronesian' and 'Jōmon' identities in the Neolithic of the Ryukyu islands, *Documenta Praehistorica* 29: 257-262.2012(査読有)

Hudson, Mark(員数3,1番目) Navigating hunter-gatherer resilience: networks and insularity in the prehistory of the Ryukyu Islands" *Networks, Interaction and Emerging Identities in Fennoscandia and Beyond*, Helsinki: Société Finno-Ougriene: 49-66,2012(査読有)

黒住耐二「ナガラ原東貝塚出土の貝類遺体(2011年度)」『熊本大学考古学研究室活動報告47:41-45,2012, 査読無

高宮広土「ヒトはいつ頃沖縄諸島に適應したか:『貝塚時代前IV』説」『先史・原史時代の琉球列島~ヒトと景観』,25-42,六一書房,2011, 査読無.

高宮広土「狩猟採集民のいた島、沖縄」『先史・原史時代の琉球列島~ヒトと景観』,165-187,六一書房,2011, 査読無.

高宮広土ほか(員数4名,1番目)「名護市屋部前田遺跡出土の圧痕土器」『南島考古』30:85-88,2011, 査読無.

新里貴之「南西諸島における先史時代の墓制()-沖縄諸島-」『地域政策科学研究』8:101-127,2011, 査読有

新里貴之「琉球列島における埋葬遺跡の文化的景観」『先史・原史時代の琉球列島:ヒトと景観』,243-266,六一書房,2011, 査読無.

新里貴之「鹿児島県徳之島トマチン遺跡」『考古学研究』第57巻第4号(通巻228号):122-124,2011, 査読有

黒住耐二「琉球先史時代人と珊瑚礁資源:貝類を中心として」『先史・原史時代の琉球列島-ヒトと景観』,87-107,六一書房,2011, 査読無.

Kan, H. Ryukyu Islands. *Encyclopedia of Modern Coral Reefs: structure, form and process*, 940-945, Springer, 2011, 査読有.

高宮広土他(員数3名,1番目)「真志喜森川原遺跡出土の植物遺体分析報告」『南島考古』29:93-98,2010, 査読無.

新里貴之「南西諸島における先史時代の墓制()-トカラ列島・奄美諸島」『地域政策科学研究』7:71-90,2010, 査読有

新里貴之「南西諸島の様相からみた喜界島」『古代末期・日本の境界：城久遺跡群と石江遺跡群』,71-83,森話社,2010,査読無.

新里貴之「南西諸島の縄文集落の葬墓制」雄山閣編集部(編)『シリーズ縄文集落の多様性 葬墓制』,337-360,雄山閣,2010,査読無.

黒住耐二「宮古島外間遺跡出土の貝類遺体」『外間遺跡発掘調査報告書』3:117-125,2010,査読無

黒住耐二「貝類遺体(シーリ遺構内)」首里城跡、御内原北地区』54:480-484,2010,査読無

Takamiya, Hiroto Okinawa's Earliest Inhabitants and Life on the Coral Islands. *Okinawa: the rise of an Island Kingdom*, BAR, 1898:5-12, 2009, 査読有.

新里貴之「沖永良部島のゴホウラ貝輪未製品資料」『南の縄文・地域文化論考』,91-104,南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会,2009,査読無.

新里貴之「貝塚後期文化と弥生文化」『弥生文化の輪郭』,148-164,同成社,2009,査読無.

[学会発表](計126件内招待講演24件)

高宮広土 琉球列島先史原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究: Overview, 環太平洋の環境文明史: 第5回国際研究者全体集会, 慶応大学三田キャンパス(東京)2014.2.9.

(招待講演) Takamiya, Hiroto, The colonization of the Ryukyu Archipelago, Japan. The 20th Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association, Aspara Angkor Resort and Conference Hotel, Siem Reep, Cambodia, 2014.1.16.

新里貴之「考古学からみた貝塚時代の文化的画期」環太平洋の環境文明史: 第5回国際研究者全体集会, 慶応大学三田キャンパス(東京), 2014.2.9.

(招待講演) Hudson, Mark "Asian Studies and the Anthropocene", Association of Asian Studies, Philadelphia Downtown Marriott Hotel, March 29, 2014

高宮広土 狩猟採集民のいた島、沖縄 No.2, 第67回日本人類学会, 国立科学博物館筑波研究施設(つくば市), 2013.11.2.

(招待講演) 高宮広土 先史沖縄琉球列島の特殊性, 立命館大学(京都市), 2013.5.19.

(招待講演) Takamiya, Hiroto, The Islands of Okinawa, where Hunter-gatherers Once Throve, 78th Society for American Archaeology, Convention Center, Hawaii, USA, 2013.4.6.

Takamiya, Hiroto A New Perspective on Hunter-Gatherers: a case study from the Islands of Okinawa, Japan, 7th World Archaeology Congress, Dead Sea Convention Center, Jordan, 2013.1.16.

新里貴之(員数13名,1番目)「南西諸島沖永良部鳳雛洞遺跡の調査」日本考古学協会第79

回総会, 駒沢大学(東京), 2013.5.25-26.

新里貴之「沖永良部島洞穴奥部のグスク時代遺跡」第6回鹿児島県考古学会・沖縄考古学会合同学会, 沖縄県立埋蔵文化財センター(沖縄県西原町), 2013.11.2-3.

新里貴之(他13名,2番目)「沖永良部島鳳雛洞第4洞口遺跡の調査報告」日本洞窟学会第39回大会, 銀座ルノアール(東京), 2013.11.16-17.

Hudson, Mark "Artifacts and hyper-objects in the Anthropocene." TAG USA University of Chicago, May 10, 2013

Hudson, Mark(他4名,1番目), "Resilience and social-ecological change in the late prehistoric Okhotsk culture of eastern Hokkaido." European Association of Archaeologists, University of West Bohemia, Pilsen, Czech Republic, September 7, 2013.

黒住耐二・新里貴之・高宮広土「貝類遺体からみた沖縄のグスク文化成立期」日本動物考古学会第1回大会, 慶応大学三田キャンパス(東京), 2013.11.16-17.

高宮広土 グスク時代の農耕 第66回日本人類学会, 慶応大学日吉キャンパス(東京), 2012.10.4.

新里貴之「貝塚時代の社会変化: 交流・交易品を判断材料として」復帰40年沖縄国際シンポジウム: これまでの沖縄学、これからの沖縄学, 早稲田大学(東京), 2012.3.29-31.

新里貴之「奄美・沖縄諸島における埋葬遺跡」日本考古学協会第78回総会(2012年5月27-28日:東京)

新里貴之「琉球列島先史時代の葬墓制」沖縄考古学会2012年度研究発表会, 読谷村文化センター(沖縄県読谷村), 2012.7.1.

Hudson, Mark "Archaeology and Interdisciplinary in the face of global ecological crisis." Neolithic Seminar, University of Ljubljana, Ljubljana, Slovenia, November 10, 2012.

Hudson, Mark "The Paimmi-nu-Nagabaka site and social-ecological resilience in Miyako history." 東アジア考古学会, 九州大学(福岡市), 2012.9.9.

黒住耐二「沖縄諸島の歴史変遷を貝類からみる」平成24年度第2回琉球環境文化史研究会, 沖縄県那覇市おもろまち(沖縄県立博物館・美術館), 2012.12.9.

(招待講演) Kan H. et al. (員数5名,1番目) Development of faro topography in the Indian Ocean atoll. 日本地球惑星科学連合2012年大会, 幕張メッセ国際会場(千葉市), 2012.5.23.

菅浩伸「琉球列島における珊瑚礁環境の特徴形成過程」平成23年度第1回琉球環境文化史研究会, 沖縄県立博物館・美術館(沖縄県那覇市おもろまち), 2012.12.9.

(招待講演) Takamiya, Hiroto The Evolution of Complex Societies in the

Islands of Okinawa, 76th Society for American Archaeology, Convention Center, Sacramento California, USA, 2011.4.1.

(招待講演)高宮広土 「琉球列島の先史・原史文化と環境」, 第四紀学会 2011 年大会, 鳴門教育大学(鳴門市) 2011.8.28.

新里貴之「徳之島トマチン遺跡: 島嶼部の石棺墓」平成 23 年鹿児島県考古学会, 黎明館(鹿児島市), 2011.7.16.

新里貴之「大隅諸島埋葬遺跡の考古学研究」第 65 回日本人類学会大会, 沖縄県立博物館・美術館(那覇市), 2011.11.4-6.

Hudson, M. and M. Aoyama "Skeletal health indicators of social-ecological resilience in the early modern Ryukyu Islands." Resilience 2011, Arizona State University, Phoenix AZ, March 13 2011.

(招待講演) Hudson, M. and M. Aoyama, K. Hoover "Resilience of premodern social ecological systems in the Japanese Islands." Conference on environmental history of Japan, Tokai university Hawaii Center, Honolulu, HI, March 29, 2011.

(招待講演)Hudson, Mark 「地球環境変動と考古学研究」第四紀学会 2011 年大会, 鳴門教育大学(鳴門市), 2011.8.28.

Hudson, Mark " ' Japanese ' and ' Austro-nesian ' identities in the Neolithic of the Ryukyu Islands." Neolithic Seminar, University of Ljubljana, Ljubljana, Slovenia, November 11, 2011.

Hudson, Mark " Globalization, environmental governance and occupational change in Alaskan Native society." Tenth Annual Conference of the Society for the Study of Occupation USA, Lodges at Deer Valley Hotel, Park City, Utah, October 22, 2011.

黒住耐二(他 3 名 1 番目)「沖縄諸島の先史遺跡で初めて確認されたオオツタノハの生息」奈良文化財研究所(奈良市), 2011.11.27.

黒住耐二「貝類からみた琉球列島の環境変遷」環太平洋の環境文明史: 第 5 回国際研究者全体集会, 国際日本文化研究センター(京都市)2010.5.16.

黒住耐二「沖縄諸島における貝類からみた農耕」平成 22 年度第 1 回琉球環境文化史研究会, 沖縄県立博物館・美術館(沖縄県那覇市おもろまち), 2010.6.20.

黒住耐二(他 2 名 1 番目)「沖縄諸島における農耕開始直前期の動物遺体-沖縄県南城史新原貝塚の事例」第 13 回動物考古学研究会, 茨城県自然博物館(茨城県), 2009.12.19.

〔図書〕(計 12 件)

高宮広土・新里貴之(編)『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』, 616 ページ, 六一書房, 2014, 査読無.

Hudson, Mark (他 2 人編), *Beyond Ainu Studies: Changing Academic and Public*

Perspectives, pp.272 University of Hawaii Press, 2013, 査読有

高宮広土・伊藤慎二(編)『先史・原史時代の琉球列島〜ヒトと景観』, 306 ページ, 六一書房, 2011, 査読無

高宮広土(編)「南西諸島の先史学」『考古学ジャーナル』597 号, 26 ページ, 2010, 査読無.

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高宮 広土 (TAKAMIYA, Hiroto)
札幌大学・地域共創学群・教授
研究者番号: 40258752

(2) 研究分担者

新里 貴之 (SHINZATO, Takayuki)
鹿児島大学・埋蔵文化財センター・助教
研究者番号: 40325759

(3) 研究分担者

黒住 耐二 (KUROZUMI, Taiji)
千葉県立中央博物館・動物学研究科・首席上席研究員

研究者番号: 80250140

(4) 研究分担者

ハドソン マーク (HUDSON, Mark)
西九州大学・リハビリテーション学部・教授
研究者番号: 20284052

(5) 連携研究者

菅 浩伸 (KAN, Hi ronobu)
岡山大学・教育学研究科・教授
研究者番号: 20294390